

---

# 時計の音

嶋本圭太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時計の音

### 【Nコード】

N7076W

### 【作者名】

嶋本圭太郎

### 【あらすじ】

僕がいるこの空間は、壊れたものばかり置いてある。

それらは毎日、どんどん増えていくんだ。

だけど、あるとき送られてきた大きなカプセルの中には・・・

(前編) (前書き)

さらっとした掌編を書くつもりだったのですが、  
妙に分量が増えてしまったので前後編です。  
では、どうぞ。

(前編)

僕の暮らすこの地には、毎日いろんなものが送られてくる。

たとえば、つま先に穴のあいたくつ。

たとえば、ページの破れた推理小説。

たとえば、針はずれた時計。

たとえば、爆発しなかった爆弾。

ほかにもたくさんあるけれど、どれもこれもが僕には必要ないものだ。

なぜかって？

なぜって僕は、くつをはかなくても歩けるし、推理小説を読まなくても退屈しないし、時間を知らなくても焦ることはないし、爆弾が急に爆発したって大丈夫だから。

ここは閉じられた空間だ。

床も壁も天井も、全体が鋼鉄で目張りされている。

天井の高さは10メートル以上、壁際に立つと向こうの壁が見えないほど広い。だけど、ここには僕以外、誰もいない。

外がどうなっているのかは知らない。僕は目を覚ましたときからずっとここにいるからね。出入り口もいつさいないから、調べてみることもできない。

そんな密室状態の空間に、ときおりぼうつと光の珠が浮かび上がることがある。すると、そこからいろいろなもの落ちてくるんだ。最初にあげたようなね。

この光はともきれいだし、なにが落ちてくるのか見るのは楽しいので、僕は光を見つけるとそこへ向かって走っていく。

今日最初の光は、室内のすみっこの方に生まれた。僕が走っていると、光から小さな白いかたまりが音もなく落ちて、光の珠は消えた。

僕が近づいて確認すると、それは小さくて白い、うさぎのぬいぐるみだった。なかなかしつかりした造りだが、首がほとんどもげて中の綿毛が飛び出してしまっている。ここへ送られてくるものはみんなこうなのだ。

僕がぬいぐるみを手にして眺め回していると、また光の珠が生まれた。今度は中央だ。あのあたりはいちばんよく光の珠が生まれるので、そこから落ちてきたものが積みあがってちよつとした山のようになっている。

また光から何かが落とされた。乳白色の卵のような形。だがずっと大きい。2メートルくらいはあるだろうか。

そいつはうず高く積みあがったゴミの山の上にごちりと落ちて、それから今度は雪の上を滑るようにしてこちらへ向かってつっこんできた！

僕はびっくりしたけれど、とっさの判断で横へ飛んでよけた。卵のようなそれは僕がさっきまで立っていたところを突っ切って、壁にぶち当たって盛大な音を立てた。

そいつは壁にぶつかっても割れてしまうこともなく、そのままの形でそこにあつた。

ここにはいろんなものがあるけれど、これと同じものはない。

卵でなければなにかのカプセルだろうか。いずれにしても、中に何か入っていそうな形状に見えた。

僕はぬいぐるみとその辺へ近づきだして、カプセルへと近づいた。

それは表面がともつるりとしていて、うつすらと僕の顔が映りこんだ。ただし湾曲しているので、奇妙に引き伸ばされた間抜けな顔をしている。

どうやって加工したのか、見た限りまったく切れ目の入っていない

いそれをぺたぺたこんこんとたたいたり触ったりしていると、偶然にも小さなカバーの下にボタンがあるのを見つけた。

シンプルな、白くてまるいボタンがふたつ。

ひよっとしたら、押したら開くかもと思って、まず左のボタンを押した。

反応がなかったので、今度は右のボタンを押す。

すると、空気の抜ける音がして、唐突にカプセルの真ん中に亀裂が入った。ついさきほどまでは、まったくひとつの物体に見えていたのに！

カプセルは白い煙を吐き出しながら、上半分を跳ね上げて開いていく。

そして、カプセルは完全に開いた。

僕は白い煙がはれるのももどかしく、中をのぞき込む。

中に横たわっていたのは、僕と似た外観をもった別の生き物。

つまり、人間だった。

僕は、人間を見るのは初めてだった。なにしろここから一度もでたことがなかったし、ここに送られてくるものはこれまで壊れたものばかりだったから。

そうだ。さらに驚くべきことに、カプセルの中の人間はまだ生きていたのだ。

目を閉じ、意識はないようだったけれど、胸は緩やかに上下動し、かすかな呼吸音も聞き取れる。

僕とは違う長い髪に、柔らかそうな白い肌。彼女は女性だ。僕は頭の中にあつた知識からそう判断した。

彼女は控えめにフリルのついた白いブラウスに、赤のロングスカート<sup>スカート</sup>を身につけていて、なかなか美しく着飾っていた。

ただ、その肌はいささか白すぎて、頬もすこし瘦<sup>こ</sup>れている。

寝顔は安らかだが、ひよっとしたら病気なのかもしれない。

僕は飽きることなく彼女を観察していたが、やがて彼女に触れてみたいという衝動を抑えきれなくなった。

おそるおそる手を伸ばし、刺激を与えないようにその頬にそつと触れてみる　つもりだったのだが、彼女の肌は予想以上に柔らかくて、僕の手はぐに、と彼女の顔が変わるほどに思い切りその頬を押し格好になってしまった。

「ん……」

その刺激で、彼女の長いまつげが揺れた。口からは吐息とともに小さく声が漏れる。

目を覚まそうとしている。

僕はあわてて手を離し、すこし距離をとった。

緊張している。何しろ、ここでは僕以外のはじめての動く存在だ。

やがて、彼女の両目がゆっくりと開かれた。

彼女は、すぐには覚醒しきらないのか、なんだかその大きな瞳を開いたり閉じたりしながらまどろんでいた。僕のことには気がついていない様子だったけれど、僕は僕で、どう声をかけたらいいかわからずに、ただ少し離れた位置から彼女のことを眺めているだけだ。

「……………くあ」

彼女の口が大きく開き、そんな音が聞こえた。あくびをしたのだ。僕はそれだけでいたく感動した。

彼女がもそもそと身を起こす。まだすこし眠そうな顔であたりを見回して、ようやく僕のこと気がついた。

「……………やあ」

なんと言ったらいいかさん迷ったあげくの挨拶。

けれど、彼女はそれには返事をしてくれなかった。

「ちよつと、離れて！」

僕を見るなり目を見開いた彼女は、僕の控えめな挨拶を打ち消すように、そう叫んだのだ。

僕はたつぷり五メートルは離れていたのだけれど、彼女がそう言ったのもう一メートル後ろに下がった。

「これでいい？」

けれど、彼女にはまだお気に召さなかったらしい。

「ぜんぜん、良くない！ていうか、でていかないよ！」

僕は彼女の要求を聞いてあげたかったのだけれど、それは無理な話だった。ここはただひとつの空間で、出入り口なんかはないのだ。

そう答えると、彼女は改めて辺りを見回して、「そうか、ここはもう……」とつぶやくと下を向いた。

それから、カプセルの縁にいすに腰掛けるようにして座りなおした。

「もっと、離れようか？」

僕はできるだけ彼女の要求をかなえるつもりでそう言ったのだけれど、彼女は首を振った。

「いい。もう、遅いし」

「遅い？」

「手遅れってこと。だから、離れなくていいよ。こっち来て」

今度は、手招きをされた。僕は一メートル前に進んで元の位置に立ったのだけれど、彼女は手招きをやめない。

「もっとこっち」

そう言われたので、もう三メートル前に進む。

「もっと」

また一メートル前に進んだ。

「あなた、なんでここにいるの？」

これはひどい言葉だ。僕は憤慨した。

「君がこっちに来ていって言ったんじゃないか」

「そう言う意味じゃなくって。あたし、ここには誰もいないって聞かされていたんだけど」

彼女は高い天井を見上げながらそう言った。

「誰に？」

「みんなに」

そう言つと、彼女は視線を僕に向けた。ふたつの瞳にまっすぐのぞきこまれるなんて初めての経験で、僕はドキドキした。

「僕はずっと昔からここにいますよ」



「ふっん」

彼女は僕の言葉を信用したのかしていないのか、僕の目を見たまままで首をかしげた。

「ねえ、息が苦しくなったりしない？」

今度は突然そんなことを聞いてくる。

「どうして？」

「しないんだ」

質問に答えたわけでもないのに、彼女は勝手に納得してしまった。

「あなたって、人間なの？」

彼女の質問はどれも唐突だけれど、これはとびきりだ。

僕は彼女を見るまで知識の中でしか人間というものを知らなかったけれど、僕の外見はどう見たって人間の男性のものだ。どうして、僕が人間でないなんて思うのだろうか？

確かに、僕は食事をしなくても平気だし、酸素がないところでも生きていけるし、爆弾が爆発したって大丈夫くらい頑丈だけれど……。

あれ？

質問されて初めて真剣に考えてみると、僕ってふっつうの人間とはずいぶん違うぞ。

「人間じゃ、ないのかも？」

「なにそれ」

彼女は僕の中途半端な答えを聞くと、口元を押さえて笑った。

「ロボットじゃないの、あなた」

「ロボット……」

たしかにロボットは、食事をしなくても、呼吸をしなくても問題ない。爆弾が爆発しても大丈夫かはわからないけど、少なくとも人間よりは頑丈な場合が多いだろう。

「そうかも」少し考えた後、僕はそう答えた。

「あなた、自分が何なのかって、考えたことなかったの？」

「なかった。だって、僕はずっとここにひとりきりだったから」

「へんなの」

また彼女は笑った。彼女が笑うのを見ると、なんだか僕も楽しくなってくるようだった。

「ロボットなら、一緒にいても問題ないわね」

彼女は笑うのをやめると、僕の方を見てそう言った。それから、自分が腰掛けている隣を片手でぼんぼんとたたいた。

「こっち来て。隣」

僕は自分でもどうしてかよくわからないけど、そう言われて少しためらった。でもなかなか動き出さない僕を彼女がすこしにらむようにしたので、ちよつと緊張しながら彼女の隣に腰掛けた。

僕は彼女との間にすこしすき間を空けて座ったのだけれど、彼女はこちらをちらりと見ると、お尻の位置をずらしてこっちに近づいてくる。

腕と腕がくつついた。

「ちゃんとあつたかいのね」

彼女がそう言った。僕の体温のことだろうか。

「わたしね、こうやって誰かの隣に座るのって、はじめてなの」

「君も、ずっとひとりだったの？」

僕の言葉に、彼女はすこし驚いたような顔をしてこちらを見た。

それから下を向いて、言った。

「そうね。ずっとひとりだったわ」

その表情は、すこし寂しげに見えた。

「人間って、集まって暮らしているのが普通なのかと思ってたよ」

「もちろん、それが普通よ。私のまわりにも人間はたくさんいたでしょうね」

「なのに、ひとり？」

彼女がなにを言いたいのかわからなくて、僕は首をかしげた。

「そうよ。せっかくだから、私の話を聞いてくれる？」

「もちろん。ぜひ聞かせてよ」

「ありがとう」

そう言うと、彼女は寂しそうな表情のまますこし笑った。

「あのね。あたしは保菌者なの」

「ホキンシャ？」

「病原菌を身体の中に飼っているのよ。それも、とびきり強力な奴で、発症したらあつというまに死んでしまうの。しかも感染力もものすごく強くて、素手で身体に触れたらもうアウト」

「触っただけで？」僕はびっくりした。「そういえば、僕さつき君にちょっとだけ触ってしまったんだ」

僕が動揺したのが気に入らなかつたのか、彼女は頬を膨らませて僕に抗議した。

「あなたは人間じゃないんだから平気でしょ。今だって腕が当たってるじゃないの」

「あ、そうか」

「もう……ていうか、ヘンなところ触らなかつたでしょうね」

「頬にちよつと触れただけだよ」

「ならいいけど」

彼女はひとつ息をつくつと、気を取り直して話を再開した。

「生まれたばかりの頃に感染して、それからずっと病室で過ごしていたの。小さい頃はお母さんが見舞いに来てくれていて、素肌が当たらないように抱っこしてくれたりしたらしいけど、残念ながら覚えてないわ」

「どうして？」

「本当に小さい頃の話だったからよ。わたしが大きくなるにつれて、病原菌の感染力がどんどん強くなっていった、私がものごとろつくころには、空気感染するようになっていたの。それまでわたしを担当していたお医者様が、突然せきこんで倒れて、そのまま死んでしまったのを覚えているわ」

「そうなんだ」彼女が淡々と話すので、僕もそれだけしか言えなかつた。

「そのあと、わたしの病室はドアと窓が二重について、簡単には出

入りできない嚴重なものに変わったわ。それからつい最近まで、わたしはそこから一步も出ることなく過ごしていたの。食事を持ってくる人と、診察をするお医者様だけが部屋に入ってくるけど、どちらも嚴重な防護服を着ていた。とくに食事を持ってくる人は看護婦さんなんですよけど、室内にいる間に私が腕をちよつとでも上げようとしたら声を上げて驚いて、おかしいくらいだったわ」

「お母さんは？」

「最初の頃はときどき病室の前まで来て、窓越しに電話でお話したわ。でもだんだん来なくなって、もう三年くらい顔を見てないな」

お母さんについて語るときだけ、彼女の声の調子がすこし変わるようだった。

「それで十年くらいそうしていたんだけど、ついに防護服を着ていても感染するようになってしまった。またお医者様だった。だけど表情がわからないくらい分厚い防護服を着ていたから、苦しんでいるのか踊っているのかしばらくわからなかったわ」

そう言って彼女は笑ったけど、それはすこし無理のある笑いだった。

「それまで、どうしてか知らないけれどみんなわたしを生かそうとしていた。だけど、ついに限界が来たのね。みんなどうやってたら私を穩便に殺せるか話し合いをしたみたい。もちろん、わたしの目の前でしたわけじゃないけど。それで、結局私を医療用のカプセルに入れて、ここへ送りこむことにしたってわけ」

「どうしてここに？」

それまで僕の方を見て話していた彼女は、そう聞かれるとたんにそっぽを向いた。

「ゴミを捨てるならゴミ捨て場に、ってことですよ」

「ゴミ……？」

「そうよ。ここは星の外に造られたゴミ捨て場なの。もう地球には粗大ゴミを捨てておける場所なんてないから」

「でも、僕はゴミじゃないよ？」

僕は人間じゃないかもしれないし、ロボットかもしれないけれど、ゴミじゃないことは確かだ。どこも壊れてなどいない。

「わたしも、自分がゴミだなんて思っただけでいいわ。でもそれって自分が決めるんじゃないかと、まわりが決めることでは？ 結局あなたも、まわりに不要だと思われたから、ここに来たのよ」

そうなのだろうか？僕は自分がどうしてここへ来たのか思いたそうとした。けれど、僕ははじめて目覚めたときからここにいるのだ。思い出せるはずもなかった。

「でも、わたしよりはまし。わたしは不要どころか、周りのひとに害を与えてしまうもの」

僕が考えにふけっていると、彼女は独り言をつぶやくようにそう言って、ひざを抱えた。

「わたしにカプセルに入るように伝えただけは、わたしが抵抗するかもって思っていたみたいだけど、わたしはすぐに承したわ。だって、あのまま意地を張ってあそこで生きていたところで、いいことなんかひとつもないに決まっているもの」

「そうなの？」  
「そうよ」

彼女はこちらを見ず、不機嫌そうに答えた。

「でも、これからはきつといいことあるんじゃないかな。僕には病気はうつらないみたいだし、だれにも害を与えたりしないよ」

「こんなゴミ捨て場で、どんないいことがあるって言うの！」

彼女の機嫌を少しでもよくしようと思って言ったのだけれど、彼女はその言葉がたいそう気に入らなかつたらしくて、突然大声を上げた。

「……あなたを怒鳴ったって、仕方ないよね。ごめん」

すぐにそう言って謝ってくれたけれど、僕の身体は縮こまってしまっただけには戻らなかった。

「それにね」彼女は落ち着きを取り戻すと、ぽつりと言った。「もうすぐわたし、死んじゃうんだ」

「とても元気に見えるけど」僕はまた彼女が大声を上げないかとすこしだけびくびくしながら言った。「病気が発症するの?」

「ううん」彼女は首を振った。

「じゃあ、どうして?」

「毒を飲んだから。遅効性の毒よ。カプセルに入る前に渡されたの。飲んでおけば、苦しい思いをしなくてすむからって。本当ならカプセルの中で眠っているうちに毒が効いて死んでしまうはずだったのに、あなたのせいでその前に起きてしまったわ」

「そんな!じゃあ、また眠らないと」

「目が覚めたばかりじゃ、眠れないわ」

僕は頭を抱えた。僕がよけいなことをしたせいで、彼女はこれから苦しんで死ななければいけないのだろうか?

「なにか、僕にできることはない?」

僕は立ち上がると、彼女の正面に立ってそうたずねる。僕は彼女にお詫びをしたい一心でそう言ったのだけれど、彼女はしばらく無言で僕のことを見つめたあと、唐突に吹き出した。

「あなた、変な人ね」

まさかそんなことを言われるとは思わなかった。

「そ、そうかい?」

目を丸くしてそう答えると、彼女はさっきよりもはっきりと笑い声をあげた。

「だってロボットなのに、驚いたり頭を抱えたり、なんだか人間みたいなんだもの。それとも、実は人間なのかしら?」

「でも、人間だったら君の病気に感染してしまうんじゃない?」

「そうね。だからやっぱ、あなたはロボットね。だけど、とって変なロボットだわ」

よほどおかしかったのか、彼女は目の端に少しばかり涙を浮かべ、それを指先で拭いた。

「ねえ、お願いしてもいいかしら」

「なんでも言つてよ」

僕は胸を張った。なにをお願いされるのかは皆目見当がつかなかったけれど、最大限の努力をするつもりだった。

彼女はにこりと笑って、言った。

「わたしの恋人になって」

「恋人？」まったく予想していなかったので、思わず聞き返してしまった。

「そう、恋人」

「でも、僕はロボットだろ？」

「でも、とても人間らしいわ」

どう返答したものかと考えていると、彼女は視線を逸らしてしま

う。「わたしじゃ、いやかな……。病気持ちだし、ずっと病室にいたから身体もしまつてないし、あたまでつかちだし」

僕はとにかく彼女を悲しませたくはないと考えていたので、あわてて弁解した。

「そんなことはないよ。君の病気は僕にはうつらないし、君の身体は十分きれいだ。あたまたいして大きくない」

「そういう意味で言ったんじゃないけど」彼女がまた僕を見る。「じゃあ、OKしてくれる？」

「君がそう望むのなら、喜んで」

僕がそう答えると、彼女はそれまで見せた中でもとびきりの笑顔になった。

「ありがとう」

僕はその笑顔を、とても美しいものだと思った。

(後編)

彼女は立ち上がり、僕の正面に立った。それではじめて、彼女の身長は僕よりもずっと低いのだと気づいた。

「じゃあ、恋人のロボットさん。わたしになにをしてくれるの？」  
彼女はそう言って、期待しているような、意地悪をしているような、惑わすような視線を僕に向けた。

「えっと、そうだな」

僕は恋人同士ってなにをするものなんだろう、と必死で考えた。

「キスをしようか？」

恋人同士ならきつとするだろう、と思ったのだけれど、彼女は不満げに下を向いた。

「残念、はずれ。ちょっと急ぎすぎだわ。そんな風にならなればよかったよ」

怒られてしまった。

もしかしたらこれで恋人失格なのかな、と思ったけれど、彼女は次の答えを待っているようだった。

僕はあらためて考える。だけど、彼女を納得させられるようなアイデアは浮かばなかった。僕は両手を広げ、降参した。

「ごめん、どうしたらいいの？」

「だらしないわね。もう降参なの？」

「そんなこと言っても、僕はいままでずっとひとりでここにいたんだ。恋人ができるなんて思ってもみなかったから、舞い上がってしまったってどうしたらいいかわからないよ」

僕の言い訳を聞くと、彼女は考えるそぶりをして「それもそうか」と言った。

「だろう？だから、きみが教えておくれよ。最初はなにをしたらいいの？」

すると彼女はさっきよりもさらに考えこんで、黙ってしまった。



「まさか、君も知らないんじゃない？」

「そんなことないわ。確かにわたしも実際に恋人ができるのは初めてだけれど、病室にいるあいだいろんな本を読んでいたんだから」  
そう言ったあとまたしばらく考えて　ただ待っている僕にはその時間はとても長く感じられた　ようやく彼女がこちらを向き直った。

「そうね、それじゃあ……なにか贈り物をしてちょうだい」  
「贈り物？」

「そう。本当は待ち合わせをしてデートっていうのをしてみたかったけど、ここじゃちょっと無理ね。だから、ここで待ち合わせをしていたことにするわ。それで、男の子はデートのたびに女の子に贈り物を渡して機嫌をとるの。素敵なものをくれたなら、　そうね、手をつないであげるわ」

僕は彼女の言葉につられて、彼女の腰に当てられた右手を見た。彼女の肌は全体的に白いけれど、指先はほんのりと赤い。血が多く通るからだろうか。ぷっくりとして柔らかさそうで、僕はその手に触れてみたいと思った。

けれど、彼女は僕の視線に気がつくのと、両手をさつと背後に隠してしまう。

「さあ、なにをくれるのかしら？」

どうやら本当に、彼女を納得させないと手はつないでもらえないらしい。僕は辺りを見回した。

ここにはいろんなものがある。だけど、みんなどこかしら壊れたものだ。そんななかで、彼女を喜ばせることができるものってなんだろう？

液晶にひびが入ったテレビだろうか？

空気が抜けてへにやへにやのサッカーボール？

ハンドルのない自転車？

底がめくれてしまったスニーカー？

……頭に浮かんだものは壊れたものばかりのこの空間で比較的き

れいなもので、もちろん役には立たないけれど僕の宝物だった。でも、どれも彼女を喜ばせるには足りないように思えた。

なにかないかな？女の子を喜ばせてあげられるもの……。

考えながら振り向いたとき、ちょうど目に入ったものがあつた。

そうだ、これはどうだろう？

「ちよつと、待ってて」

僕は彼女にそう言つと、走つていつてそれを拾い上げて、また彼女の元へ戻つてきた。

「これはどうかな？」

それは、うさぎのぬいぐるみだつた。

彼女を乗せたカプセルがここへくる直前に送られてきたものだ。

「わあ、かわいい」

彼女がそう言つて手を伸ばしたので、僕は彼女にぬいぐるみを手渡した。

彼女はぬいぐるみを受け取るとそれを抱きしめようとしたが、うさぎは頭はだらしなく後ろへ倒れてしまい、後頭部と背中がくつついた。

「……これ、首が取れかけているわ」

飛び出してきた綿毛をぬいぐるみの中に押し込みながら、彼女が言つた。

「ごめん、ほかにないんだ あつ、でもあの山から針と糸を探してくれば、縫いつけるくらいはできるかも」

壊れたものしかないここには縫い針と裁縫用の糸はないだろうが、代わりになるものは見つけれられるかもしれない。

「だけど、彼女は首を振つた。「いいわ。あなた不器用そうなもの」

「そう 「僕は肩を落とすした。」

彼女の期待に応えることはできなかった 僕はそう思ったのだが、彼女はぬいぐるみの首が後ろにいかないように注意して片手で胸に抱くと、空いた右手を僕に向かって差し出した。

「はい」

「えっ？」

「言ったでしょ。手をつないであげるって」

期待に応えられなかったのに、どうして？と思ったけれど、彼女の気が変わらないうちに、と僕は右手で彼女の手を握った。

柔らかくて、ひんやりと冷たい。だけど、握っているうちに暖かさが流れ込んでくる。

はじめて女の子の手を握った僕は感動していたのだけれど、気がつけば彼女はまた不満げに口をとがらせていた。

「それじゃ握手じゃない。逆よ、逆」

僕が手を離すと、彼女はしかたないわね、と言ってから、僕の隣にならんだ。それから左手で僕の左手首をつかむと、自分の右手を上から包むようにして握らせた。

「ね。こうやって、手をつないで散歩するのよ」ぬいぐるみを抱えなおしながら、僕を見上げて彼女が言った。

「じゃあ、すこし散歩をする？」

「そうね、何にもないところだけど、公園を歩いているつもりで行きましょう」

植物の一本も生えていない公園を、ふたり連れだつて歩きだす。

彼女はところどころに落ちているがらくたを指さして笑ったりしながら、左腕に首の取れかかったうさぎのぬいぐるみを大事に抱えて歩いた。

「うれしいわ、これ。ありがとう」歩きながら、彼女はそう言ってくれた。

僕は彼女の右手の感触を感じながら彼女について歩いた。彼女の表情をもっと見たいけれど、露骨に見るとまた怒らせるかな、と思つて少しずつ、盗み見るようにしながら。

「あそこに座りましょう」

散歩はさして広くない範囲を一周して終わった。彼女が座りましようと言ったのは、先ほどまで座っていたカプセルだった。

僕たちはさっきと同じように、並んでカプセルに腰掛けた。さっ

きと違うのは、まだ手をつないだままだということだ。

「これ、ほんとにうれしいわ」

ぬいぐるみを見ながら、彼女がそう言った。

「そんなに？」

「わたし、誰かから手渡してものをもらうの、はじめてだったの。

昔から私に触るのは、防護服に身を包んだお医者様だけだったから」

彼女が僕を見た。「ねえ、もっとお礼がしたいわ」

「なにをしてくれるの？」

僕が聞くと、彼女は一瞬だけ目をそらしてから「目を閉じて」と言った。

僕が言われたとおりにすると、つながれた手がほどかれた。内心がっかりしていると、左肩に重さを感じた。

それから、唇に柔らかいものが押しつけられた。

それはすぐに離れて、それからまた手がつながれたので、僕はお礼は終わったのかと目を開けた。

こちらを見ていた彼女と目が合う。

「何か言いなさいよ」彼女の頬がさっきよりも紅潮しているのを見て、やっと気づいた。

「ああ、キスしたのか」

「言わなくていいの、ばか」

言いなさいって言ったくせに。

彼女は頬を片方膨らませてそっぽを向いた。と思ったら、僕の左肩に頭を預けてきた。

怒っているのかいないのか、よくわからない。女の子とつきあうのって大変なんだな、と僕はそんなことを考えていた。

お互い、しばらく無言でいた。

「……あなたって、あつたかいわね」

静寂の中で、彼女がぼつりとつぶやく。

「君の方があつたかいと思うけど」

僕の左側面は、彼女の熱をずっと感じている。

「そうかしら」

彼女は顔を上げた。

「本当に人間みたいね、あなた」

そう言うと、今度は僕の胸に顔を押しつけてくる。

両手は僕の背中に回された。僕の両手も自然と彼女の背中に回り、抱き合う形になる。

「夢だったの。いつか私の病気を治してくれる王子様が現れて、私はその人と結婚するの」

そこまで言うと、彼女は顔を上げて「子供っぽいかしら？」と聞いた。

「そんなことないよ」と僕が言うと、安心したようにほほえみ、また顔を僕の胸に埋めた。

「あなたは王子様っていうほど格好よくもないし、ちょっと頼りないけど、いいわ。だってわたしのそばにいてくれるんだもの」

「うん」

「こんな風に誰かと抱き合ったり、キスをしたり できると思わなかった」

「うん」

「でも……やっぱりあなたって、ロボットなのね」

「うん えっ？」

彼女はいつの間にか僕の左胸に耳を当てて、僕の心臓の音を聞いていた。

「だって、あなたの胸の音、時計の音なんだもの」

「そうなの？」

僕は自分の心臓の音を聞いたことはなかった。

「そうよ。とく、とく、とく、とくじゃなくて、チク、タク、チク、タクね」

彼女はそう言うておかしそうに笑う。

「それに、あなたと抱き合って、わたしはドキドキしているのに、あなたの胸の音はちっとも早くならないわ」

「そんな。僕だってドキドキしているよ」

「でも、ずーっと同じペースよ。チク、タク、チク、タク……」

僕の頭の中では、彼女と手をつないだあたりからずっと緊張していて、心臓の鼓動だって早くなっているはずなのに、僕の胸に耳を当てた彼女が口ずさむペースはずっとかわらない。

「きっとそれ、心臓の音じゃないんだよ」

「じゃあ、何の音？」

「わからないけど」

彼女は同じ姿勢のまま、まったくすすすと笑った。

「でも、この音聞いていると、なんだかとても落ち着くな……。ねえ、しばらくこうしていてもいい？」

僕が了承すると、彼女は目を閉じた。浮かせていた腰を僕のひざの上におろして、だき抱えるような姿勢になる。

そのまま、また数分。

僕は内心緊張してドキドキしているつもりだったのだけれど、彼女が何も言わないってことは、時計の音に変化はないのだろうか。あたりは全く静かで、彼女のかすかな呼吸の音だけが聞こえてくる。

その音は、だんだんと深く、ゆっくりになっているようだった。

不意に、彼女がぴくりと体をふるわせて、目を開けた。

僕の方を見る。すこしだけ、悲しげな色をしていた。

「もう、眠る？」

僕が聞くと、無言でこくり、とうなずいた。

彼女ははじめにそうだったように、カプセルの上に横たわった。首の取れかけたウサギのぬいぐるみを、大事そうに抱えながら。

そして、僕の手を愛おしそうに握りながら。

「ありがとう、カプセルを開けてくれて」

彼女は僕にそう言った。

「わたし、あなたに会えたおかげで、無理だと思っていた願い事、

いっぱい叶ったの」

「僕も、きみに会えてよかった。僕はずっとここでひとりなんだって思っていたから」

そう言っつて髪を優しく撫でると、彼女はくすぐったそうに目を細めた。

「でも、ごめんね」そう思ったら、彼女の顔が悲しげにゆがんだ。

「わたし、またあなたのこと、ひとりにしてしまっわ」

「そんな顔をしないで」僕は笑った。「僕、記憶力はとてもいいんだ。だからずっと、君の顔も声も、いつでも思い出せる。ひとりじゃないよ」

「うん」

「それに、僕はロボットかもしれないけれど、ロボットだって永久に動き続ける訳じゃないだろ。僕だってそのうち、君のもとへ行くさ。すこし時間はかかるかもしれないけれどね」

「うん。待つてるね」

彼女に笑顔が戻った。でも、その目は眠気のせいか、それとも遅効性の毒とやらが効いてきたのか、もう半分ほども開かないようだった。

「ねえ、キスして。あなたから」

彼女がそう言った。僕は彼女の手を握ったまま顔を近づけ、そっと口づけた。

彼女の目が閉じられ、その拍子に涙が一筋、こぼれて落ちた。

そして、それきり彼女の目は開かなかった。

僕は彼女の頬を撫でて、それでも彼女の目が開かないことを確認すると、つないでいた手をそっとほどいた。

彼女の抱えているうさぎのぬいぐるみの首の位置をなおしてやってから、彼女から離れる。

わかりにくく隠れているカプセルの操作ボタンをもう一度見つけたして、開いたときとは反対のボタンを押した。

空気の抜ける音がして、カプセルがゆっくりと閉まっていく。やがて上半分と下半分が貝のように合わさると、あっという間に合わせ目は見えなくなり、元通りの卵のような形になった。

これで、もう彼女の顔を見ることはない。

だけど、寂しがることはない。彼女に言ったとおり、僕は記憶力がとてもいいんだ。目を閉じれば、彼女の顔も声も、握った手の温かさも、抱きしめた身体の柔らかさも、なにもかも鮮明に思い出せる。

これからずっと、僕はひとりじゃない。

問題は、本当に僕が動かなくなる日が来るかどうかなんだけどこればかりはわからない。今のところ、僕の身体は全く問題がない。

だけど、どれだけ長い年月だろうと、彼女の顔や声を思い出しながら暮らせば、きっとすぐのことさ。

僕はふと思いついて、がらくたの山のぼり、あるものを探した。僕の記憶通りのところに見つけたそれは、針のない時計だった。全く役に立たないけれど、実は中はまだ動いている。

耳を当ててみると規則正しい音が聞こえた。彼女に教えてもらった、これが僕の心臓の音だ。

彼女の声を思い出して、時計の音に乗せてみる。チク、タク、チク、タク……。

目を閉じると、まるで彼女がそばにいるみたいだ。そう思うだけで、ドキドキが早くなる気がする。

時計は変わらぬリズムを刻み続けている。

僕はそのことにもどかしさを感じながらも、彼女の教えてくれたその音を飽きることなく聞き続けるのだった。

終わり



(後編) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

長編を書き終えた後だいぶ気が抜けたので、リハビリのつもりで書き始めたのですが思ったよりも時間がかかりました。

よろしければ、ご意見、ご感想などお聞かせください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7076w/>

---

時計の音

2011年9月29日03時15分発行